

思いに寄り添い、命に触れる

「早く看護師さん呼んで！あんたは頼りにならん！」

実習の2日目、バイタルサイン測定を行った私に、患者のMさんが怒鳴った。SPO₂98%を逆さから86%と読んだMさんがパニックを起こしてしまったのだ。肺から始まった癌が全身に転移していたため、SPO₂の低下は致命傷となる。「98%なので大丈夫ですよ」と言ってもMさんは聴く耳を持ってはくれなかった。騒ぎを聞きつけた看護師から説明を受け、Mさんはようやく安心してくれたが、納得するまでMさんの顔は不安でいっぱいだった。

「数値を過信しないこと」指導者はそう言い、実際に体に触れたのか、と私に聞いた。そうだった。目で見て手を触れる。看護の基本中の基本だ。あの状況でそんなこと、思いもしなかった。実習前、耳が痛くなるほど言われていたはずなのに……。

「不安な思いにさせてしまい、すみませんでした」私はMさんに頭を下げ、「Mさんの気持ちに沿った看護が提供できるよう頑張ります。Mさんのそばで勉強させてください」と言った。Mさんは快く受け入れてくれた。

それからMさんは「勉強になることはなんでも協力するから」と、入浴介助や排泄介助の際には、至らないところ、改善して欲しいところを正直に私に伝えてくれた。教科書通りにはいかないことばかりだったが、個別性に沿った「生きた看護」を学んでいるようで、毎日が新鮮な気持ちでいっぱいだった。

Mさんが私の前で弱音を吐くことは一度もなく、けれど、抗がん剤の副作用で下痢と嘔吐が止まらず、眠れない日々が続き、体重は下降線を描く一方だった。

「退院を見届けることができなくて残念です」実習の最終日、そう告げた私にMさんは「ほんとね」と小さく笑った。Mさんは私に見送られながら退院することを目標にしていたものの、抗がん剤の影響で白血球が下がり過ぎ、退院が延期になっていた。今回で三度目の延期だった。Mさんは「最後のお願い」と言い私の聴診器を指さし、「自分の心音を聴いてみたい」と言った。「へえ、こんな音がするんや……」聴診器を自分の胸に当てたMさんの顔がほころんだ。「わたし、ちゃんと生きてるんやな……これが命の音なんや……」そう言ったMさんの声はか細かったが、それでも私にはとても力強い声に聞こえた。命を営む力強さだ。ずっとMさんは闘っているのだ。病気と、明日死ぬかもしれないという怖さから、逃げることなく。そんな思いに私はどれだけ寄り添うことができただろうか。「絶対に看護師さんになるんやで」そう言ってMさんは私の手をぎゅっと握った。伝わってきたぬくもりが、生きることへの尊さに思えた。

思いに寄り添い、命に触れる。今でもMさんとの日々は私の看護の原点となっている。